

科学哲学科学史専修

教授 伊勢田 哲治 京大文卒，京大修士修了，University of Maryland 院修了，
Ph. D.(Philosophy)

准教授 伊藤 憲二 東大教養卒，東大修士修了，Harvard University 院修了，
Ph. D. (History of Science)

〔主要著書・論文等〕

伊勢田『認識論を社会化する』（名大出版会 2004），『疑似科学と科学の哲学』（名大出版会 2003），『科学哲学の源流をたどる』（ミネルヴァ書房，2018）

伊藤『励起：仁科芳雄と日本の現代物理学』（みすず書房 2023 年 7 月出版予定）；“Transnational Scientific Advising: Occupied Japan, the United States National Academy of Sciences,” *The British Journal for the History of Science*, online, 2023: 1-15; “Early Japanese Reactions to the Interpretation of Quantum Mechanics, 1927-1943,” in Olival Freire, Jr. ed, *Oxford Handbook of the History of Quantum Interpretations* (Oxford University Press, 2022), pp. 687-707; “The Scientific Object and Material Diplomacy: The Shipment of Radioisotopes from the United States to Japan in 1950,” *Centaurus* 63(2), 2021: 296-319;

本専修は、「科学とは何だろうか」という問いに哲学と科学史の二つの観点から答えることを目指す、日本では数少ない科学哲学科学史の専門家養成機関である。専任のスタッフだけではカバーしきれない領域については、非常勤講師を招いて、広く科学哲学および科学史の問題が扱えるように配慮している。本専修の第一の特色は、科学哲学と科学史の両分野が研究の両輪となっている点である。また、科学哲学における特色としては、論理的分析の重視、科学の具体的な題材（たとえば統計力学、進化論、空間・時間）に即した哲学的問題の重視、科学上の古典的著作の原典読解も踏まえつつ現代の科学哲学の問題 設定に即した視野の広い問題の追求が挙げられる。また、科学史においては、国際的な科学史・科学論の研究状況を踏まえた 20 世紀の物理学史および 19 世紀以降の日本における科学技術史を中心に、アーカイブズ資料および原典に基づいた個別研究を通しての、哲学的視点の下での歴史的な科学像の探求が特色として挙げられる。

大学院生がこの専修で研究を進めるにあたっては、科学の学説内容を理解できるだけの科学的知識だけでなく、語学力や文献読解の能力という人文学特有の能力も必須である。科学を知らずに科学哲学や科学史をやることが無謀であるのと同様に、科学・哲学・歴史学・社会学・人類学・ジェンダー研究等の古典的著作を読みこなすための人文社会学的素養を軽視することもまた無謀である。たとえば、20 世紀前半の物理学を歴史学的に研究するためには理論内容を理解するための科学知識とともに論文を読める程度のドイツ語と 20 世紀の社会・文化の理解が必須である。研究テーマによっては、その他の言語を修める必要が出てくるかもしれない。科学哲学の例を挙げれば、時間と空間の哲学をやるには相対論を学ばずにすませることはできないが、他方で哲学においてこの問題がどう扱われてきたのかを理解し、その視点から科学者の著作を読み直す読解の力も要求される。修士課程に入る段階でこれらの条件を満たすのは難しいかもしれないが、その条件を自分の研究の必要に応じて将来満たしていくだけの心構えと根気は持っていてほしい。それだけの努力に値

する学際的で面白い問題がたくさん見出されるのがこの研究分野なのである。

科学哲学・科学史の隣接領域として科学技術社会論がある。これは科学技術についての社会的・人類学的・心理学的分析や、科学技術と現代社会との接点で生ずる問題の分析・解決策の提案などを含む幅広い領域である。当専修の軸足はあくまで科学哲学・科学史にはあるものの、こうした科学技術社会論的研究を研究課題とすることも可能である。

本専修の修士論文については専修ウェブサイトで公開しているので参照されたい。

https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/philosophy_and_history_of_science/phs-student-masterstheses

メディア文化学専修

教授 喜多 千草 コンピューティング史、現代技術文化史、現代文化学
准教授 松永 伸司 分析美学、ゲーム研究、現代文化学

〔主要著書・論文等〕

喜多 『インターネットの思想史』（青土社、2003）、『起源のインターネット』（青土社、2005）、
「『社会的責任を考えるコンピュータ専門家の会（Computer Professionals for Social Responsibility）』の成立と発展」『史林』101巻1号（2018）；

松永 「キャラクタは重なり合う」フィルカル1巻2号、2016年、『芸術の言語』（ネルソン・グッドマン著、慶應義塾大学出版会、2017）（共訳）、『ビデオゲームの美学』（慶應義塾大学出版会、2018）

メディア文化学専修は、情報・史料学専修と二十世紀学専修が合併することにより、2018年度に発足した新しい専修です。この新専修の理念・目的を以下に紹介します。

現代はメディアの高速化・大規模化・廉価化・大衆化・グローバル化が著しく、文化や情報は短時間のうちに伝播拡散し、それにより国や地域を超えた新たな文化・価値観・生活様式が生み出されています。しかし、同時に従来文化・国家・制度も存続しており、社会的規範や歴史認識などをめぐる新たな政治的・文化的な軋轢を生みだしています。

本専修では、こうした現代特有のメディアや文化事象にかかわるさまざまな問題を考察します。本専修の教育の大きな特徴は、従来の人文・社会科学の手法に基づきつつ、新しい事象を扱うためにこれまでになかった分析視点や他分野の手法なども積極的に採り入れる点にあります。そのため本専修では、歴史学・哲学・社会学・文学に加えて、マンガ学、ゲーム学、人文学系の情報学などの科目が用意されています。

本専修での研究テーマはジェンダー表象、視覚文化、ファッション、ゲームなど多岐に涉りますが、所属学生には各々の研究テーマに即した方法論を自ら切り拓く気概が求められます。

現代史学専修

教授 小野沢 透 アメリカ現代史・国際関係史

教授 塩出 浩之 日本近現代史

上記に加えて、人文科学研究所所属の下記の教員が教育と研究指導に参加している。

教授 高木 博志 日本近現代史

教授 石川 禎浩 中国現代史

准教授 村上 衛 中国近現代史

准教授 藤原 辰史 農業史・環境史

准教授 小堀 聡 経済史

〔主要著書・論文等〕

小野沢 “Formation of American Regional Policy for the Middle East, 1950 – 1952,” *Diplomatic History*, Vol.29, No.1, Jan, 2005 ; “The Search for an American Way of Nuclear Peace : The Eisenhower Administration Confronts Mutual Atomic Plenty,” in *The Japanese Journal of American Studies*, No. 20, 2009. 『幻の同盟—冷戦初期アメリカの中東政策』（上・下、名古屋大学出版会、2016年）. 「『同時代』と歴史的時代としての『現代』」『思想』No.1149（2020年1月、岩波書店）.

塩出 『岡倉天心と大川周明 「アジア」を考えた知識人たち』（山川出版社、2011年）. 『越境者の政治史 アジア太平洋における日本人の移民と植民』（名古屋大学出版会、2015年）. 『公論と交際の東アジア近代』（編著、東京大学出版会、2016年）

現代史学専修は、1966年に旧史学科の一講座として設立された、文学部の中では比較的新しい専修である。

現代史学専修は、「現代」という時代が、それ以前の時代とは異なる歴史的動態を有し、それゆえに、この時代を研究するためには、特定の国や地域を対象とする伝統的な歴史学とは異なる分析上の視点やアプローチが必要とされるという立場から研究・教育を行っている。19世紀後半から20世紀初頭にかけて、アジア・アフリカ地域が欧米を発祥とする主権国家の国際システムに取り込まれ、あるいは欧米列強の公式・非公式の支配下に入ったことで、地球上のすべての地域が相互に結びつけられ、「ひとつの世界」が出現した。近代以前にも遠隔地域間の交易や情報の伝播は見られたが、19世紀後半以降に出現した「ひとつの世界」では、ヒト・モノ・カネ・情報などの国・地域を越えた移動や伝播は恒常的なものとなり、その速度と規模は、21世紀の今日に至るまで、様々な曲折を経ながらも増大し続けている。この「ひとつの世界」は、地域を越えた人や社会の連携や相互依存を促進する一方で、新たな分断や対立をも引き起こしてきた。たとえば、地球上のほぼすべての土地が主権国家と植民地という制度のもとに分割されたことによって、それ以前の人的・経済的な結合が断ち切られる事態、あるいは対立しあう「国益」を追求するために国家が人的・物的資源を大規模に動員する

事態も、逆接的ではあるが、「ひとつの世界」が出現したことの帰結であった。現代史学専修は、人類の歴史が「ひとつの世界」の世界史として展開するようになった時代を「現代」と捉え、この「現代」に生起する様々な歴史的事象を世界史的な視野から分析し考察することを目指している。

現代史学専修の研究と教育は、分析対象の当事者や同時代の観察者が残した一次史料の精確な読解を考察の出発点に据える、実証的な歴史学の方法論を取る。現代史の研究では、オーラル・ヒストリーや図像・映像をも史料として用いることがあるが、それらについても、文字史料と同様に厳密な史料批判と合理的な解釈が必要とされる。本専修の特徴は、一次史料から得られた知見を、能う限り世界史的な文脈に位置づけて考察しようとする点にある。そのためのアプローチは、無限にあると言ってよい。たとえば、国際関係史や比較史のアプローチ、あるいはトランスナショナルな視点を導入することが有効なこともあるし、ナショナリズム、ポストコロニアル、ジェンダーなど、社会・政治・思想などに関する様々な理論を援用することで複雑に絡まりあう事象を解きほぐすのが容易になることもある。

本専修を志望する学生には、史料の読解に必要とされる言語を含む、複数言語の修得が必要とされる。また、大学院では、学術雑誌に掲載できるレベルの研究が期待されるため、実証的な研究を進めるために必要な一次史料を入手できることが、研究テーマを定めるための条件となる。これらを踏まえた上で、現代世界に対する幅広い関心を持って、意欲的な研究テーマに取り組んでほしい。